演奏

裏側から見上げる水面
喜々として泡立つ航跡
その向こうに広がっているだろう陽だまり

僕はいつだって置いて行かれた
今さら何に目を凝らせと―――
自身の声さえ聞き取れない

　　無であることを欲したことがあった
　　意思だけを捨てたことがあった
　　だが結局、何らを捨てることはなかった

美しくはないが官能を刺激するもの―――
それは大いに意味のあることだったけれども
同時にどうでもよいものでもあったのだろう

僕を包むものが水であることの嬉しさ
これは一体どうしてだろう
まるで羊水へと回帰してゆくような嬉しさだ

あらゆる時間の経験をなぞりながら
進み過ぎた時計を逆に回す―――
それによって蒸発することができる気がしている

エコーのかかったピアノの音がゆっくりと浮き上がる
しかしそれは、水面に触れた途端に跳ね返り
驚くほどの速さで水底へと消えていった

だからもう、奏でることに対する興味はない

根気よく待つことだ

歌うことを命じられる時が来るのを

(2011.5.21)